

「ようこそグアテマラ」へ寄稿させて頂くにあたり、これまでのコラムを読ませて頂きました。皆さんの奥深い文章と、私のコラムは趣きのちがうものになりそうですが、ここグアテマラで暮らし、感じていることを、飾らず書かせて頂きたいと思います。

現在私は、ソロラ県のソロラ市に住んでいます。グアテマラを愛してらっしゃる方々はご存知だと思いますが、ソロラ国立病院の上のほうです。観光ガイドを仕事としており、オファーがあるとソロラから出かけていきます。「どうしてソロラ？」日本の方だけでなく、グアテマラの人からも質問されるのですが、好きだからです。たくさんの知り合い、友だちがいる場所だからです。

私の仕事でもある観光業は、現在グアテマラの一番の外貨収入源。グアテマラの多くの人にとっても憧れの職業です。様々な方がグアテマラを訪れますが、私がご一緒させて頂いているのはある程度のお金をかけたツアー。泊まるホテル、食事を取るレストラン、移動するバス、一定以上のランクを使います。それでも日本の方からすると色々なカルチャーショックがあるようです。そのような中でお客様が初めて出会う**グアテマラ**、**グアテマラの人々**。この国を少しでも知って頂きたい。好きになって頂きたい。そう思いながらガイドをしています。もちろん、このコラムを読んでくださっている方々のように、本当のグアテマラを知るといえるのは到底無理なことです。うわべだけを見ているに過ぎません。

けれど今まで全く知らなかった**グアテマラ**という国を、そこに生きる人々を少しでも知ってもらおうということは大切なこと。今後**グアテマラ**と耳にした時、必ず「なんだろう？」と思ったださるはず。ほんの少しでもグアテマラの人々と触れ合った方なら愛着を持ってくださるはず。知らないうちに**グアテマラ**から無関心ではなくなる。それが最初の一步であり、全ての始まりになると信じています。

空港でお別れするとき「素敵な国だった」「絶対また来たい」という言葉を聞くと、グアテマラが褒められたようで私まで嬉しくなります。

ガイド中は話し続けるためでしょうか、仕事が終わりに大きな荷物を担ぎ、ソロラ(パナハッチェル)行きのローカルバスに乗りながら、窓の外を流れる景色を見ていると、なぜか“ほっ”とします。皆さんご存知のボンネットバスで、カーブのたびに振り回され、飛び上がりながら乗っているのに“ほっ”としているのです。そして3,4時間揺られ暗い中ソロラに着き、家までの通りを歩いていると今度は“嬉しく”なってきます。行きかう人々と挨拶をかわし、右手にアティトラン湖畔の村々の明かりを見る・・・それだけなのですが。なぜか暗闇の中でも私を見つけて「Mitsuyo ~」とかけてきてくれる子どもたち。胸がいっぱいになります。子どもたちのこの笑顔があるから私はここにいるのだと思うのです。

彼らの貧しさ。両親が受けている差別。祖父母が語らない過去。今なお彼らはたくさん  
のものを抱え生きています。それを目のあたりするたび、深く考えさせられます。

一人でここに居るのだからと、家によんでいろいろと振舞ってくれるソロウの人たち。一流  
レストランの料理よりも、トルティーヤとアボガド、コーヒーとパンのほうが美味しいと思う毎  
日。挨拶のたび子どもたちがほっぺにしてくれるチュ。お母さんがしてくれる抱擁。お父さん  
のたくましい握手。人のあたたかさを感じながらここで暮らしています。

これからも私に出来ることをしよう。私と同じ気持ちを持ってらっしゃる方々と歩き続けて  
いこう。そう思っています。

グアテマラへようこそ メールマガジン 第43号掲載